

概要報告

実施期日	令和8年8月3日(月)
部会名	中学校 保健体育部会

研究主題

主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善について
(含む個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実)

テーマ

『ベースボール型の授業を楽しい・得意と感ずるための工夫』

提案概要

【単元】E球技（ベースボール型）「ソフトボール」

【学年】第2学年

【研究の概要】

学校教育目標を達成するための、教科として目指す生徒像に必要な資質・能力を身に付けるため、単元の中でどのように生徒が「楽しい」「得意」と感ずる場面を作れるかを軸に考えた。今回の研究では、ソフトボールの実践の中で、場の工夫やルールの設定、ICTの活用を通し生徒の「できた」「わかった」を引き出す研究を展開した。

【研究の実践】

1. 事前アンケートを実施し、ソフトボールに対する意識調査

- (1) 小学校でどのようなベースボール型の授業を行ったか
- (2) その単元について自分自身がどんな意識で取り組んだか
- (3) ソフトボールの授業に対してどんな印象をもったか

小学校での授業は「楽しかった」「どちらかといえば楽しかった」と回答した生徒が70%を超えていたものの、「得意」「どちらかといえば得意」と回答した生徒が約35%という結果だった。

授業は楽しかったが、ルールの難しさや投げること、打つことへの劣等感から得意と感ずる生徒が少なかったと考察した。

2. アンケート結果を受けた授業の工夫

- (1) 「ベースボール5」の実施
- (2) 教具の工夫
- (3) ベースボール型授業動画教材の工夫

【成果】

(1) 「ベースボール5」の実施

単元導入時に5人制の「ベースボール5」を取り入れたことで、ルールが簡易化され理解が深まり、生徒同士の教え合いの機会が増えた。さらに、バッティングを手打ちにすることで高い技能がなくとも打つことができ、誰でも楽しめる環境を作ることができた。

(2) 教具の工夫

アンケート結果より、「ボールが怖い」「痛い」「バットが重い」という意見を受け、ボールを硬式テニスボールに、バットを軽いプラスチックバットに変更した。その結果、力の弱い生徒や障がいのある生徒でも安全に楽しく行うことができ、アダプテッドの視点からも有効であることがわかった。

(3) ベースボール型授業動画教材の工夫

「横浜DeNAベイスターズのベースボール型授業動画教材」を用いたことで、投打のフォームやポイントを視覚的に見ることができ、自分に合ったドリルを選択し、主体的に練習する姿が見られた。多数の

場面で生徒の自己肯定感を高める結果となった。

質疑応答

なし

協議の柱及び協議概要

1. ICTを取り入れた授業について

- ・参考動画を提示したり手本となる動画を提示したりすることで生徒が自らの動きと比較し、フォームの改善やポイントについての理解を深めることができる。
- ・器械運動においてスローモーションカメラやタイムシフトカメラを用いることで、自分の動きの理解を深めることができる。
- ・自分のベストパフォーマンスを動画で提出させ、評価をつける。
- ・器械運動で自分の画像の身体にラインを引くことで動きのポイントがわかる。
- ・単元の最初（技能習得前）の動画と単元終末（技能獲得後）の動画を比較させることで生徒が成長を可視化できる。

2. ベースボール型の教具やルール工夫について

- ・段ボールグローブの活用。捕球技術の難しさを軽減することで誰でもアウトにできる工夫を行っている。
- ・ルールの簡易化。1塁まで行ったら1点、2塁は2点など。
- ・ランナーとの交錯を避ける工夫。フラフープの設置や全てのベースにダブルベースの採用など。
- ・子どもに道具を選ばせる。
- ・3アウト交代ではなく、全員に必ず打席が回ってくるような工夫。
- ・フィルダーベースボール。守備が集まってアウトをとる。

まとめ概要

今回の研究では事前アンケートをとり、生徒のソフトボールに対する意識調査をもとに、生徒の実態に合った授業工夫をされている点が非常に良い取組だった。生徒が主体的に学習に取り組むための条件の1つとして「安心・安全な場づくり」が確保されていることが求められる中、教具を工夫し、誰でも安全かつ効果的に学習に取り組める工夫が施されており、技能の向上の実感まで得られる授業作りだった。

実際の授業では、ICTを活用し「ベースボール型授業動画教材」を生徒に提示することで、いつでもどこでもアクセスすることが可能な環境を作り、生徒が自分に合った課題を選択し、ドリル練習として取り組む様子があった。さらに、事前動画と終末動画の撮影を行ったことで、技能の成長を視覚的に認識することができ、課題解決に向けて考える姿を多く見ることができた。

一方で、事後アンケートの結果から「楽しかった」「どちらかといえば楽しかった」と回答した生徒が約96%だったのに対し、「得意」「どちらかというと得意」と回答した生徒が約49%となり、事前と比べて数値が上がったものの、生徒の技能に対する認識に課題を感じた。

それでも、教具の工夫やルールの設定によって多くの生徒がベースボール型の授業に前向きに取り組む姿勢が見られ、「できた」「わかった」が溢れた授業実践であった。